

シリーズ 「補綴装置および歯の延命のために」 Part 5 口腔内環境の劣化

峯 篤史

Less than ideal intra-oral environment

Atsushi Mine, DDS, PhD

補綴治療計画の策定の上でも、歯および補綴装置の予後を考える上でも、唾液性状や摂取食物などの口腔内環境因子は重要である。かつては特に問題とされていなかった要因であるが近年、高齢化社会の到来や生活習慣の変化により口腔内環境の悪化が指摘されている。「シリーズ 補綴装置および歯の延命のために」のPart 5として、口腔乾燥や酸蝕症などの口腔内環境変化に注目し、専門家に最新情報をもとに執筆して頂いた。そのタイトル「口腔内環境の劣化」は、編集委員会での協議のうえ、口腔内環境の“変化”や“悪化”でなく、“劣化”という言葉を採用することが決定された。

まず柿木保明先生に口腔乾燥をテーマとして、原因と病態・診断と評価・治療とケアについて、御自身が発表されている数多くの報告をもとに解説して頂いた。口腔乾燥症の「臨床判断基準」(表3)は、舌背部の唾液の状態の臨床所見のみで術者が決定するもので、きわめて簡便であるものの、自覚症状・唾液湿潤度検査紙・口腔水分計の全てと有意な相関が認められており、とても興味深い。治療法の項では、使用する保湿剤や漢方薬の具体的な名称を挙げて説明させている。なお、特に寝たきりの患者に対する口腔ケアでは原則として水分を使用しないことが提案されている。

北迫勇一先生には酸蝕症について、数多くの症例写

真と共に説明して頂いた。酸蝕症の初期状態の所見は「歯頸部に健全歯質が一層残る」、「同様な臨床所見が複数歯におよび散見される」であること、診断の心がけとして患者の日常生活に関しても目を向ける必要があることが記されている。また、酸蝕症がう蝕の発症と関連する“Complex Caries-Erosive Lesions”は、歯質崩壊が急速に進行するとともに臨床上識別が困難であると述べられている。最終項「酸蝕症と補綴装置に関する思案」には本誌読者へのメッセージが盛り込まれており、生活習慣への配慮が必要であることが重ねて提言されている。

佐藤裕二先生・北川 昇先生には、超高齢化社会の現状を記して頂くとともに、口腔環境関連因子の相互関係(図1)をまとめて頂いた。続いてエッチング材を用いた歯石除去法をはじめとした様々な義歯管理法や口腔粘膜の加齢変化と義歯による咬合荷重負担能力など、義歯に深く携わられた両先生の臨床経験と研究成果が披露されており、必見である。そして、義歯安定剤やジェルタイプ保湿剤の使用に関する見解が述べられている。最後に、歯列崩壊や補綴装置生存短縮を防止するために高い質の義歯を作り上げること、制限された患者の機能や環境にあわせて工夫することの重要性が強調されている。

題名および執筆者

「口腔乾燥症の病態と治療」

「酸蝕症の病態と臨床対応」

「口腔内環境の劣化に伴う歯列崩壊、補綴装置生存短縮の病態とその対応」

九州歯科大学 柿木保明先生

東京医科歯科大学 北迫勇一先生

昭和大学 佐藤裕二先生、北川 昇先生